

二 三和・花月字名一覽

番号	大字	字	地	番
一	鶴	根	(雀)	四
二	当	根		一七
三	向	小		一九
四	小	杉		三三
五	郡	杉		四四
六	五	反		五九
七	迫	反		七六
八	七	枝		八五
九	川	田		九九
〇	原	上		〇六
一	渌	上		一一
二	森	本		三四
三	上	更		三六
四	源	塚		四七
五	榎	田		五四

一	喜	四		一五五
二	大	お		一六二
三	田	た		一六五
四	屋	根		一九〇
五	岩	の		一八九
六	下	内		二一〇
七	前	下		二一六
八	上	敷		二二六
九	天	敷		二四八
〇	松	山		二八一
一	天	田		二九五
二	神	梅		二八〇
三	山	上		二九四
四	城	平		三〇七
五	瀬	脇		三二七
六	城	脇		三三七
七	山	平		三三八
八	戸	平		三三二
九	ノ	脇		三四四
〇	ノ	脇		三五七
一	城	堀		三六〇
二	上	原		四〇三
三	小	徳		四一七
四	慶	老		四二七
五	治	畑		四三〇
六	平	畑		四五四

五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六

長なが小こ八は柿かき桑くわ住す長なが髪かみ住す住す鋤す畝くわ五ご売い養よう茶ちゃ橋はし大お塔とう原はら
反たん吉よし吉よし吉よしノの 反たん町ちやう峯みね面めん園えんノの 松まつ久く
塚つか又また田た田た原はら後うしろ迫せき永なが吉よし前まえ元もと田た田た寺じ畑はた詰つめ山やま保ぼ地ち

八一九 八一三 八〇四 七九六 七八四 七五四 七三二 七二五 六九五 六八九 六七九 六五九 六四八 六三二 五八九 五七四 五六二 五二九 五二〇 五〇五

八三〇 八二八 八二二 八〇三 七九五 七三三 七五三 七三〇 七二四 六九四 六八八 六七八 六五八 六四七 六三一 五八八 五七三 五一六 五二八 五〇九

七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六

菰こもカベノ 成なり法ほ成なり尾お郷ごう官かん榎えのき鮎あひ長ちやう免めん平ひらナナニに中なか松まつ井い
宮みや峠とうげノ 華け重しげノ 四し者しや倒たうノ 者しや倒たうノ 者しや倒たうノ 下したルキ 村むら葉は尻しり
迫せき迫せき重しげ堂どう下した坪つぼ郎らう泰たい町まち町まち町まち町まち下したルキ 村むら葉は尻しり

一一三 一〇九九 一〇九五 一〇八八 一〇六二 一〇四四 一〇二八 一〇二二 九九〇 九八二 九七三 九五四 九四六 九三三 九二八 九〇七 八八九 八六二 八三八 八二二

一一二 一一二 一〇九八 一〇九四 一〇八七 一〇六一 一〇四三 一〇二七 一〇二二 九八九 九八一 九七二 九五三 九四五 九三〇 九一七 九〇六 八八八 八六一 八三七

左 九四 九三 九三 九二 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八〇 七九 七六 七七 七六

小こ 迫さ 中なか 吉よし 迫さ 小こ 原はる 屋や 西さい 平ひら 瀬せ 合ごう 吉きつ 後うしろ 鳥とり 宗そう 貞さだ 貞さだ 貞さだ
迫さ ノン 御み 方ほう ノン 戸と 士し 居い 源げん 清きよ ノン 清きよ ノン
塚づが 上うえ 尾お 畑お 畑お 堂どう 口くち 敷しき 寺じ 上うえ 口くち 冠かぶり 坂さか 平べら 原はる 原はる 上うえ 清きよ 前まえ

一、六四七 一、六四一 一、六二〇 一、五八三 一、五七二 一、五五六 一、五二三 一、五一〇 一、四七三 一、四六九 一、四四四 一、四二八 一、三九九 一、三九三 一、三九〇 一、三四八 一、三二八 一、二六二 一、二一四 一、一九三

一、六六三 一、六四六 一、六四〇 一、六一九 一、五八二 一、五七一 一、五五五 一、五二二 一、五〇九 一、四七二 一、四六八 一、四四三 一、四二七 一、三九八 一、三九二 一、三八九 一、三四七 一、三二七 一、二六一 一、二一三

一一五 一一四 一一三 一一二 一一一 一〇〇 一〇九 一〇八 一〇七 一〇六 一〇五 一〇四 一〇三 一〇二 一〇〇 九九 九八 九七 九六

焼やき 長なが 金かな 姥おば 草くさ 狐きつね 向むかひ 谷たん 中なか 佛ぼつ 坂さか 大お 塚づが 三み 土ど 下しも 風かぜ 石いし 横よこ 売うり
ケが 吉きち 場ば 久く ノの 久く ノン 久く ノン 角つが 井い 丁ちやう
平へら 尾お 坂さか 懐ふくろ 野の 迫さ 原はる 保ぼ 道みち 迫さ 辻つじ 保ぼ 畑はたけ 野の 内うち 原はる 穴あな 佛ぼつ 手て 畑はたけ

二、〇七九 二、〇六七 二、〇六五 二、〇六三 二、〇四二 二、〇二一 二、〇一八 一、九五七 一、九二〇 一、八六七 一、八四五 一、八四五 一、八〇八 一、七八九 一、七七七 一、七四七 一、七二八 一、七二〇 一、六八三 一、六六四

二、〇七八 二、〇六六 二、〇六四 二、〇六二 二、〇四一 二、〇二〇 二、〇一七 一、九五六 一、九一九 一、八六六 一、八四四 一、八二四 一、八〇七 一、七九七 一、七七六 一、七四六 一、七二七 一、七一九 一、六一二

一三五	一三四	一三三	一三三	一三二	一三〇	一二九	一二八	一二七	一二六	一二五	一二四	一二三	一二三	一二二	一二〇	一一九	一一八	一一七	一一六	
源	上	高	割	野	丸	長	後	白	大	吉	灰	狸	船	鉢	博	塩	鯰	面	前	
六	ノ	野	の	内	の		金	久	牟	木				多	井		高			
山	山	山	山	石	上	尾	尾	迫	尾	保	田	迫	平	石	水	石	川	石	山	川
やま	やま	やま	やま	いし	うえ	お	お	ご	お	ぼ	た	ご	べら	し	みず	いし	がわ	いし	さん	がわ

二三四	二二七	二二〇	二一八	二一八	二一六	二一六	二一四	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一四	二一〇	二一〇	二〇九	二〇八
二二〇	二二三	二二六	二〇九	二一七	二一七	二一四	二一五	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一三	二一一	二〇九	二〇九	二〇九

一五五	一五四	一五三	一五二	一五一	一五〇	一四九	一四八	一四七	一四六	一四五	一四四	一四四	一四三	一四三	一四二	一四〇	一三九	一三八	一三七	一三六
入	坂	東	尾	研	大	大	教	壁	後	中	上	前	前	十	立	向	前	屋	水	
道		千						壁		ケ	ケ	ケ				ノ				
町	本	田	藤	田	坪	塚	田	野	野	尾	尾	尾	川	山	石	山	田	敷	口	
まち	もと	だ	ふじ	だ	ひら	つか	で	の	の	お	お	お	がわ	やま	いし	やま	だ	しき	くち	

二五三	二五一	二五〇	二四九	二四九	二四八	二四七	二四六	二四六	二四三	二四二	二四二	二四二	二四一	二四〇	二三五	二三五	二三五	二三五	二三五	二三五
二五三	二五二	二五一	二五〇	二四九	二四八	二四七	二四六	二四六	二四三	二四二	二四二	二四二	二四一	二四〇	二三九	二三九	二三九	二三九	二三九	二三九

一七五 一七四 一七三 一七二 一七一 一七〇 一六九 一六八 一六七 一六六 一六五 一六四 一六三 一六二 一六一 一六〇 一五九 一五八 一五七 一五六

口くろ 五ご 宮みや 下しも 上かみ 石いし 田た 葛くず 日ひ 又また 寺てら 西にし 柳やね 下しも 乗くり 長なが 上かみ 太てえ 瓦わら 深ふか
ノの 反た 朦も 朦も ケが ノの 五ご 屋や ノの ケが 五ご 反た ケが 太てえ
坪つぼ 田た 嶋しま 足たる 足たる 坪つぼ 籠籠 原ぼる 本もと 敷敷 田た 更ふけ 坪つぼ 田た 坪つぼ 渚ぶら 木ぎ 木ぎ 田た 町まち

二、八六七 二、八四三 二、八二四 二、八〇七 二、七八七 二、七七〇 二、七三六 二、七二六 二、六八四 二、六六九 二、六五七 二、六四八 二、六四〇 二、六三四 二、六三一 二、五九九 二、五八三 二、五五一 二、五四一 二、五三一
二、九二二 二、八六六 二、八四二 二、八二三 二、八〇六 二、七八六 二、七六九 二、七三五 二、七二五 二、六八三 二、六六八 二、六五六 二、六四七 二、六三九 二、六三三 二、六二〇 二、五九八 二、五八二 二、五五〇 二、五四〇

一九五 一九四 一九三 一九二 一九一 一九〇 一八九 一八八 一八七 一八六 一八五 一八四 一八三 一八二 一八一 一八〇 一七九 一七八 一七七 一七六

通と 龍た 似に 堂どう 西にし 影かげ 迫さき 丸ま 天てん 迫さき 馬ば 小しょう 中なか 出いで 中なか 龍りゅう 生しょう 龍りゅう
ケが多 ノ ノの の 迫さき 神じん ノの 村むら 林りん 竹ちく 源げん 谷たに
戸と 鼻はな 野の 所どこ 迫さき 木き 向むか 尾ろ 原ぼる 上うえ 場ば 路じ 村むら 口くち 原ぼる 寺じ 林ばやし 寺じ

三、五八五 三、五六〇 三、五五九 三、五五六 三、五四三 三、四一六 三、三五六 三、二八六 三、二四一 三、二二二 三、一九八 三、一七四 三、一三〇 三、一三〇 三、〇八五 三、〇五八 三、〇三八 三、〇三一 二、九七四 二、九六二 二、九三三
三、六五二 三、五八四 三、五五八 三、五五一 三、四五一 三、四一五 三、三五五 三、二八五 三、二四〇 三、二二一 三、一九七 三、一七三 三、一二九 三、〇八四 三、〇五七 三、〇三七 三、〇一〇 二、九七三 二、九六一

一六	一五	一四	一三	一二	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	番号	大字 花月 (はなつき)	一六
音おと	安あん	山やま	荒あらか	小お	江え	松まつ	戸と	塚つと	土と	彦ひこ	小こ	白しろ	岡おか	鉢はち	供く		字
無なし	全ぜん	下した	平ひら	迫ご	下げ	本もと	田だ	原わら	添ぞえ	田だ	坪つぼ	石いし	廻まわり	坪つぼ	町まち	地 番	
三〇七	二九六	二九二	二六五	二五四	二三三	二三三	二〇三	一九八	一九五	一八七	一六八	一三三	三三	二二	一		三六五三
三五	三〇六	二九五	二九二	二六四	二五三	二三二	二〇二	一九七	一九四	一八六	一六七	一三一	三三	二二			

三六	三五	三四	三三	三三	三三	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二二	二〇	一九	一八	一七
城しろ	水み	ウウ	中なか	上うえ	猪い	丸まる	ササ	内うち	川かわ	丸まる	横よこ	土つち	城じよ	柳やなぎ	床ど	垣かき	ツつ	外そと	
城しろ	ノの				ノの			藤じ					野の	ノの				輪わ	
越こ	口くち	ドと	尾お	山やま	草くさ	尾お	コこ	山やま	端ぼた	田て	枕まくら	林ばやし	尾お	本もと	浪なみ	添ぞえ	ルる	町まち	
六四四	六二三	六一	六〇	五八八	五五六	五四四	五三九	四八三	四五二	四三六	四二	四〇六	三八〇	三六六	三五九	三五二	三四四	三三九	三三六
六七四	六四三	六三	六〇	五九九	五八七	五五五	五四三	五三八	四八二	四五二	四三三	四二	四〇五	三七九	三六五	三五八	三五〇	三四三	三三八

五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七

へへ坂^{さか} 案^{あん} ハは堂^{どう} 山^{やま} 小^こ 井^い 梅^{うめ} 板^{いた} 長^{なが} 野^の 穴^{あな} ソネ村^{むら} 堂^{どう} 現^{げん} 爪^{つめ} ミミ井^い
リリノ^んノ^のン^んノ^の 手^て 香^か 居^い フお ノン堂^{どう} ノンス^す
平^{ひら} 下^{した} 山^{やま} ゴ^ご 前^{まえ} 口^{くち} 鶴^{つる} 鶴^{つる} 鶴^{つる} 鶴^{つる} 田^だ 田^だ 倉^{くら} ミミ廻^{まわり} 上^{うえ} 寺^じ 谷^{たに} ミミ堀^{ぼり}

一、五七六 一、五二七 一、四八七 一、四六七 一、四一六 一、三九五 一、三三二 一、二六九 一、二五一 一、二二二 一、一八四 一、一五四 一、一三四 一、一〇七六 九〇四 八八七 八四一 七八五 七五五 七四五 七二四
一、六三三 一、五七五 一、五二六 一、四八六 一、四一五 一、三九四 一、三三一 一、二六八 一、二五〇 一、二二一 一、一八三 一、一五三 一、一三三 一、〇七五 九〇三 八八六 八四〇 七八四 七四四

七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七

流^{なが} ホほ中^{なか} 東^{とう} 西^{にし} 本^{ほん} ツつ 田^た 大^う 石^{いし} 古^{ふる} 高^{たか} 三^み 大^{おほ} 大^う 萩^{はぎ} 鬼^{おに} 隠^{かく} 花^{はな} 坂^{さか}
レ^れ タ^た ノ^の ノ^の ル^る ノ^の 屋^や 狐^こ 久^く 平^{ひら} 燈^{とう}
平^へ ち^ち 坪^{つぼ} 代^{しろ} 平^へ 村^{むら} 前^{まえ} 平^{ひら} 迫^{せき} 坂^{さか} 敷^{しき} 尾^お 石^{いし} 保^ぼ 谷^{たに} 原^{はら} 迫^{せき} 畑^{はた} 月^{つき} 山^{やま}

二、二一〇 二、〇八五 二、〇四一 一、九八二 一、九四〇 一、九〇七 一、八五〇 一、七八六 一、七五三 一、七〇八 一、六八九 一、六八三 一、六八二 一、六八一 一、六八〇 一、六七九 一、六七八 一、六七七 一、六六九 一、六三〇 一、六二四 一、六一九 一、六六八 一、六二九

九六 九五 九四 九三 九二 九一 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七

本^{ほん} 本^{ほん} ウ^う 千^{せん} 長^{なが} 上^{うへ} 冷^{ひや} 水^{みづ} 鮎^{あひ} 鳴^{なる} 藤^{ふじ} ツ^つ ク^く 駄^だ ウ^う 鳥^{とり} 山^{やま} 野^の 廻^も 土^ど
ト^と 段^{だん} ノ^ん ラ^ら グ^ぐ ド^ど ノ^ん 田^{だん} リ^り 用^{ゆう}
カ^か ガ^が ダ^だ リ^り ガ^が ノ^ん 田^{だん} リ^り 用^{ゆう}
平^{だいら} 迫^{ささ} イ^い 原^{はら} 峰^{みね} 迫^{ささ} 水^{みづ} 無^{なし} 返^{げん} 石^{いし} 原^{はら} 力^{ちから} 山^{やま} 止^{どめ} 迫^{ささ} 越^{こえ} 口^{くち} 迫^{ささ} 岩^{いわ} 平^{ひら}

二、二六八 二、二六八 二、二六三 二、二五八 二、二五九 二、二四七 二、二四〇 二、二三八 二、二五九 二、二五〇 二、二三〇 二、二〇七 二、二八八 二、二六四 二、二二八 二、二四二 二、二二八 二、二七五 二、二四九 二、二三一 二、二二二

二、二七〇 二、二六七 二、二六七 二、二六二 二、二五七 二、二五八 二、二四六 二、二四九 二、二三八 二、二四九 二、二三九 二、二〇六 二、二八七 二、二六三 二、二四一 二、二二七 二、二七四 二、二四八 二、二三〇

二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九九 九八 九七

梅^{うめ} 梅^{うめ} 仮^{かり} 堂^{どう} 杉^{すぎ} 大^{おほ} ミ^み 中^{なか} ム^む 権^{ごん} 坂^{さか} 二^に 足^{あし} ド^ど 小^こ 小^こ 仙^{せん} 源^{げん} 小^こ 更^{ふけ}
ノ^の ノ^の 才^{さい} タ^た 現^{げん} ノ^の 反^{はん} ケ^け ウ^う 塚^{つか} 太^{たい} 石^{いし}
奥^{おく} 木^き 屋^や 田^だ 山^{やま} 平^{ひら} 田^だ 磯^{いそ} 上^{うへ} 平^{へら} 辻^{つじ} 峠^{とげ} 迫^{ささ} ン^ん 上^{うへ} 塚^{つか} 道^{どう} 郎^ら 坂^{さか} 原^{はら}

三、八五七 三、七八二 三、七〇八 三、六四六 三、四八九 三、四一九 三、三六四 三、三一 三、二七〇 三、二六九 三、二四二 三、一九四 三、〇八五 三、〇五七 三、〇〇四 二、九一六 二、八四九 二、七九三 二、七七一 二、七〇七

三、九三二 三、八五六 三、七八一 三、七〇七 三、六四五 三、四八八 三、四一八 三、三六三 三、三一〇 三、二六八 三、二四一 三、一九三 三、〇八四 三、〇五六 三、〇〇三 二、九一五 二、八四八 二、七九二 二、七〇七

一三五	一三四	一三三	一三三	一三三	一三〇	一二九	一二八	一二七	一二六	一二五	一二四	一二三	一二三	一二三	二一〇	二一九	二一八	二一七
東とう	山やま	井い	本ほん	陣じん	水みづ	宮みや	田た	下しも	鶴つる	石いし	黒くろ	大たい	平ひら	柳やなぎ	善ぜん	ツつ	下しも	
				ノの		ノの	ノの		ノの	河が	将しょう	河が	四し	關たがけ	ツつ	ラら		
白しろ	口くち	堀ほり	村むら	尾お	上かみ	迫せき	尻しり	谷や	尻しり	内ち	塚づか	陣じん	内ち	原はら	郎ろう	山やま	平べら	
四、三七五	四、三七四	四、三七一	四、三六九	四、三六一	四、二七八	四、一七七	四、一五二	四、一五	四、〇九九	四、〇一五	四、〇一一	四、〇〇〇	四、〇〇九	四、〇〇八	四、〇〇二	三、九九九	三、九七四	三、九三三
		四、三七三	四、三七〇	四、三六八	四、三六〇	四、二七七	四、一七六	四、一五一	四、一四	四、〇九八	四、〇一四				四、〇〇七	四、〇〇一	三、九九八	三、九七三

三花の歴史・略年表 (伝は伝承)

年号	西暦	月	こと
弥生時代			用松・羽野原遺跡、山田原遺跡
古墳時代	四〇〇～ 五〇〇		(石包丁)、鉄ノ本遺跡ほか 羽野横穴墓群 用松古墳、迫横穴墓ほか
大化元	六四五		伝・藤山の恒雄が忍辱法師となる 彦山開祖のひとり 大化の改新が始まり、班田收受の法が行われる 糸里遺跡はそのあと
天武八	六七九		伝・八幡神が岩松ヶ峰(天瀬町鞍形尾)に示現する。
和銅四	七一―		伝・千倉に北辰社をまつる
天平九	七三七		「豊後国正税帳」がつくられる 日田郡のことを記載
延暦一三	七九四	一〇	平安京に遷都する
延長三	九二五	一二	「豊後風土記」がつくられる 日田郡五郷のことを記載
天曆六	九五二		伝・菅原貞光が羽野に天満宮をまつる
承保二	一〇七五		伝・大蔵永俊の娘千倉姫を妙見社にまつる
嘉保二	一〇九五	八	大蔵永季が相摸の節会に出場のこと が「中右記」などに記載される
建久三	一一九二	七	源頼朝が鎌倉に幕府をひらく
暦応元	一三三八	八	足利幕府がはじまる
応永四	一三九七		大蔵永息が筑前江过得大内軍と戦って戦死する
〃一九	一四一二		大蔵永息の次男永清が財津に住んで財津氏を称する
〃三〇	一四二二		永清の次男永豊は羽野に住んで羽野氏を称する
〃三〇	一四二二	一〇	財津氏が郡司大蔵永秀から訴訟の代行処理を命じられる。
永享三	一四三一		伝・大蔵永好が殺され、その霊

文安二	一四四五	大蔵日田氏が断絶し、大友日田氏が跡を継ぐ	天正二	一五七四	後、肥前等各所で戦う 石井の高井嶽に筑後問註所軍が 侵攻、財津永忠らが戦つてこれ を破る
大永二	一五二二	財津永満が大友氏の命により、 武下氏を討つ	〃	一五七六	財津鎮則、同永尚らが大友軍の 彦山攻めに参戦する
享祿元	一五二八	財津永胤が秋月軍と筑後甲石で 戦つて戦死する	〃	一五七九	財津永忠が円誉上人を迎えて竜 川寺を再興する
天文元	一五三二	財津永満が大友義鑑の勤気をう け、堤軍と戦つて破る また高 瀬軍と戦つて敗れ 周防山口に 逃れる	〃	一五八〇	財津永三らの日田諸士が大山松 原で田北紹鉄を討ち、財津永尚 が首級を挙げる 財津永秋が戦 死する
〃	一五三四	財津永満が赦されて、薬師如来 像を奉じて帰国し 竜林寺にま つる	〃	一五八一	大友宗麟が高瀬地陣原に出陣 し、財津鎮則が参陣する
〃	一五四八	大友日田氏が断絶する 財津永 満が八大群老のひとりに任せら れる	〃	一五八二	織田信長が明智光秀に討たれ、 羽柴秀吉が報復する
〃	一一	この後、財津氏を含む日田の諸 士は大友軍に参陣して筑前、筑	〃	一五八四	財津軍が筑後猫尾城を攻め、財 津永尚が戦死する
			八		同じく猫尾城攻めで財津鎮則が 戦死する

天正二〇	一五九二	一	豊臣秀吉の命で朝鮮に出兵、財津永高が参軍する	元和二	一六一六	石川忠総が日田郡を領し、丸山城に入る
文祿二	一五九三		大友義統が豊臣秀吉に罰せられ以後日田の諸士も衰亡する	寛永元	一六二四	財津統周が大原で石川家中に武威を示す
〃	一五九四		太閤検地が行われ、宮部善祥坊が豊後に遣わされる	〃 一六	一六三九	日田郡が幕府公領（寛永一〇）として、代官支配地となる
慶長五	一六〇〇	七	日田郡が太閤蔵入地となり、宮木長次郎が代官に任ぜられる	明暦元	一六五五	代官小川正久が赴任の途次、海上に羽野天満宮の奇瑞を見る
〃	一六〇一	九	関ヶ原の闘い 財津永継、永重らは日隈城を護るが、東軍方黒田氏の代官に明け渡す	天和二	一六八二	日田郡が松平直矩領となるが、三花を含む小野筋一〇カ村は天領として残される
〃	一六〇一		小川光氏が三花を含む日田郡の北半を領し 丸山城を築く	貞享二	一六八五	小野筋一〇カ村が天草代官の支配地となる
〃	一六一一	二	市の瀬・小河内の一部を含む有田郷が久留島領となる（明治維新まで）	元禄四	一六九一	藤山村で農民らが庄屋を訴える
〃	一六一一	八	財津永広、永次らが彦山で細川家中と争い、意地を示す	〃 八	一六九五	俳人中村西国が肥後小国で没する 墓碑が財津中村家墓地に在る
			財津永広が細川家預りを解かれ帰国する	宝永五	一七〇八	竜林寺薬師如来像補修の紀年銘
				延享三	一七四六	穴井六郎右衛門らが江戸の幕府に代官を直訴した罪で捕えられ、

嘉永三	文政七	〃 一〇	〃 一四	〃 九	文化四	享和三	天明三	明和八
一八五〇	一八二四	一八二七	一八一七	一八一二	一八〇七	一八〇三	一七八三	一七七二
一八五一	七	一〇	七	五	三	三	三	三
内 <small>に</small> 葬る	刑死する	竜川寺竜作上人が寺	竜林寺薬師如来縁起を板行する	飢饉に際し、雨を願って用松に	八大竜王像を建てる	僧豪潮が羽野天満宮に宝篋印塔	を建立する	廣瀬淡窓が桂林荘を開設する
安政五	〃 六	〃 四	〃 四	慶応三	〃 六	一八五九	一八五八	一八五八
幕府が「日米修好通商条約」を	調印する	大風雨によって花月川が氾濫す	る	大蔵永常の最後の著述「広益国	産考」が刊行される	郡代窪田鎮勝が制勝組を率いて	更原で大訓練を行う	同じく、山田原で大砲射撃訓練
四	三	〃	一	一	一	一	一	一
日田県が設置され、六月に松方	正義が知事に着任する	吏員に	窪田郡代が日田を退去する	大原神宮寺での騒ぎをきっかけ	に日田郡民が蜂起し、小野筋で	は千倉金毘羅社に群集して氣勢	をあげる	日田県が設置され、六月に松方
治碑」を建立する	廣瀬淡窓の撰文により「石坂修	山田常良が石坂を改修する	奉獻する	廣瀬桃秋が羽野天満宮に筆塚を	する	廣瀬淡窓が千倉金毘羅社に参詣	入陣する	塩谷正義が日田代官に任せられ
伊能忠敬が伏木から財津へ羽野	を測量する	一〇年後咸宜園に移る	廣瀬淡窓が桂林荘を開設する	を建立する	僧豪潮が羽野天満宮に宝篋印塔	を建立する	八大竜王像を建てる	飢饉に際し、雨を願って用松に
〃 六	〃 六	〃 四	〃 四	慶応三	〃 六	一八五九	一八五八	一八五八
幕府が「日米修好通商条約」を	調印する	大風雨によって花月川が氾濫す	る	大蔵永常の最後の著述「広益国	産考」が刊行される	郡代窪田鎮勝が制勝組を率いて	更原で大訓練を行う	同じく、山田原で大砲射撃訓練
四	三	〃	一	一	一	一	一	一
日田県が設置され、六月に松方	正義が知事に着任する	吏員に	窪田郡代が日田を退去する	大原神宮寺での騒ぎをきっかけ	に日田郡民が蜂起し、小野筋で	は千倉金毘羅社に群集して氣勢	をあげる	日田県が設置され、六月に松方

明治三	一八七〇	一	用松の広瀬勝造また高取成章が 挙げられる 竹槍騒動で羽野村庄屋宅等が打 ちこわされる 吏員高取成章ら が鎮庄に向かったが失敗する	明治八	一八七五	三	三和村（羽野・用松・財津）、 花月村（藤山・秋原・台・伏木・ 市ノ瀬）が誕生する
明治四	一八七一	一一	大分県が置かれ日田県を編入す る	明治一一	一八七八	三	花月簡易学校伏木分教場を設置 する
明治五	一八七二	二	第八大区会所（市郷会所）を設 置する			八	郡区町村編成法等が公布される （大区・小区制廃止）
		六	大区・小区制により県下の町村 を八大区・一五九小区とする	明治一七	一八八四	九	三和村・花月村連合村となる 日田―中津間県道が開通する
		八	台・伏木の各村は八大区・二 小区に編入される（市ノ瀬は一 小区） 学制を制定する 会所を廃し、小区ごとに用務所 を置く	明治二二	一八八九	四	日田―中津間県道が開通する （小河内経由） 市制・町村制が施行される
明治六	一八七三					四	三和村・花月村合併して三花村 となる
明治七	一八七四	一〇	三和學校が龍川寺にできる 花月學校が市ノ瀬にできる	明治二七	一八九四	七	花月川大洪水 日清戦争がおこる
		一〇		明治三一	一八九九	一	夏目漱石が大石峠を経て日田を

明治三三	一九〇〇	六	訪れる 森鷗外が日田から大石峠を経て 中津に赴く	大正三	一九一四	(在地)に改築移転する 日田―中津間県道が開通する (伏木経由)
明治三四	一九〇一	一〇	大分県立農林学校(現・日田林 工高)が創立される	大正五	一九一六	筑後軌道が全線開通する(豆田 駅開業)
明治三七	一九〇四	二	日露戦争がおこる	大正八	一九一九	バス営業が始まる
明治四〇	一九〇七	五	日田郡立工業徒弟学校が創立さ れる(明治四五年に郡立工芸学 校と改称)	大正九	一九二〇	大分県立日田中学校(現・日田 高)が創立される
明治四一	一九〇八		このころ三花村の電灯点灯戸数 二八戸	大正一二	一九二三	伏木湿田の耕地整理事業が完成 する
明治四二	一九〇九	三	三花村秋原に大火がおこる(旧 曆三月)	大正一五	一九二六	羽野に街頭を設置する
明治四五 (大正元)	一九一二	五	日田郡立工芸学校に女子部を創 立する(郡立実科高等女学校等 と改称の後、大正一二年大分県 立日田高等女学校となる)	昭和四	一九二九	三花村役場を改築する(財津町) 藤山に三花郵便取扱所を開設す る
		九	花月尋常高等小学校を市ノ瀬 (現在地)に改築移転する	昭和九	一九三四	久大線が開通する
		一〇	三和尋常高等小学校を用松(現	昭和一〇	一九三五	三花郵便取扱所が三花郵便局に 昇格する(集配は昭和一一年か ら)
				昭和一二	一九三七	伏木牧場を開設する 日華事変がおこる

昭和一五	一九四〇	一二	日田町と三芳・高瀬・光岡・朝日・三花・西有田の一町六カ村が合併して日田市となる	昭和二二	一九四七	四	伏木開拓団の入植が始まる 学制改革（六三制実施） 北部中学校開校 花月小学校に北中花月分校を併設する
昭和一六	一九四一	一	「財津家譜」が刊行される 第一回市会議員選挙	昭和二四	一九四九	六	第一回知事・市町村長選挙 第二回市会議員選挙
昭和一七	一九四二	四	小学校を国民学校と改称する	昭和二六	一九五一	四	昭和三皇巡幸 伏木開拓団を励まさる
昭和一九	一九四四	一二	太平洋戦争がおこる 伏木に三花防空監視哨を設置する	昭和二八	一九五三	六	三花公民館を設置する 花月川大洪水
昭和二〇	一九四五	六	小倉陸軍造兵廠が年末から二〇年にかけて日田に疎開する 職員・工員などが天神・清水・財津町の各戸に分宿する	昭和二九	一九五四	四	伏木原野に大火 大将陣山一円の市行造林など三四六・五ヘクタールが焼ける
昭和二一	一九四六	七	花月川大洪水	昭和三〇	一九五五	三	東有田・小野・大鶴・夜明・五和の五村が日田市に合併する
		八	太平洋戦争が終わる	昭和三一	一九五七	四	花月小学校伏木分校が伏木小学校となる
		二	第一次農地改革を実施する	昭和三三	一九五八	三	山田原畑地かんがい事業に着工する
		七	花月川大洪水（流失家屋二七戸）			四	花月中学校・小野中学校・北部

あ と が き

三花公民館の呼びかけで、三花地区の郷土史誌をつくろうという話が始まったのは、昭和六二年もあとわずかのときだった。

三花地区内では既に『財津町誌』『伏木近代史』という町史の労作が、刊行されていた。これを地区全体に広げたものをつくろうというのである。

私たちの先人がどんなことを考え、どういうくらしをし、どんな事から後世の私たちに残してくれたのか、確かめてみよう。そして、私たちはいま何をすればよいのかを探る手がかりとして、まとめてみよう。

太平洋戦争の終結を境にして、日本はすべてがガラリと変わった。高度経済成長以後は価値観までが引っくり返ってしまった。過去のことを確認するには、もう遅いくらいだが、それでもまだ明治生まれの長老も健在だ。

だといって、これ以上延ばしていたら、ほとんど生きた歴史の発掘は不可能になってしまうかもしれない。この際できるところまでやってみよう。

そういうことで、仕事は起こされた。

各町内から一〜二名ずつ出た委員は、編纂と刊行の二部会に分かれて、事にとりかかった。

実際にかかってみると、何かと困難が多い。わからないことばかりだ。

まずこれまで記録された資料というものが、はなはだ少ない。及ぶかぎりあれこれと拾い集めて、利用できるだけ利用した。

それにしても、先人の残された記録・文献はたいへんありがたかった、たとえわずかでもそれがなかったら、この小誌はあり得なかつただろう。深く敬意を表したい。

地区の皆さんにもお願いして、いろいろの資料を出していただいた。お訪ねして話をうかがったり、現地を案内いただいたりした。

たいへんお世話にもなり、ご迷惑をおかけしました。厚くお礼申し上げます。

そうして六年。ともかくも刊行に漕ぎつけることができた。

出来栄えが決して満足のいくものでないことは、何より筆をとった私たち自身がよく知っている。

しかし期日も長くなったので、ひとまず収集し得た資料をまとめて、一本とすることにした。

編述の要領はおよそ次のとおりとした。

一 記述は、読みものとしても気軽に読めるよう、平易にとつとめたが、内容は事実には正確であることを期した。

一 対象とする期間は、太平洋戦争終結の時までとした。ただし関連のある事については、戦後にも及んでいる。

一 人名は原則として敬称を略したが、例外もある。

一 引用文は出典を『』で示した。

一 参考文献はその個所ごとに注記せず、巻末に一括して挙げた。

一 談話によって記述した場合も、いちいちその個人名を示さず、巻末にまとめた。

一 執筆者別による文体の違いはそのままにして、統一をはかることはしなかった。

なお、なるべく読みやすくするように心掛けたつもりだったが、写真、文章ともなかなか思うようにいかなかったのは心残りである。

また、記述が不充分だったり、内容の誤りもあるに違いないが、ひとりでも多くの方に読んでいただいで、どんなに小さなことでも、ぜひ御意見や教示をいただきたい。地区の皆さんの指摘で、ひとつひとつ正しい姿に

充実していけたら、こんなにありがたいことはない。

そして何年か何十年かのちに、また新しい郷土史誌が書かれるようになったら、この小誌を世に出した私たちとしては、以て冥すべきである。

この書、名づけて『三花風土記』とする。

平成五年十二月

執筆者一同

執筆分担

岩沢 光夫

第一章 第一節

第二章 全

第三章 全

第五章 第二節

第六章 第二節

付録 一

浜田喜一郎

第一章 第二節

第四章 全

第五章 第一節

第六章 第一節

第七章 全

付録 二

(第三章第一節、第二節、第五章第一節は、大内房夫の稿をもとに記述)

三花郷土史誌づくり委員会

委員長

小河内町 財津 徹

副委員長・編纂部会長

財津町 大内 房夫

編纂部委員

天神町 岩沢 光夫

〃

清水町 浜田喜一郎

〃 (写真)

秋原町 石松 良行

〃 (写真)

三和団地 坂本 晃

副委員長・刊行部会長

天神町故樋口孫右衛門

〃

財津町 諫山 洋介

刊行部委員

藤山町 長尾 正

〃

伏木町 梶原喜美雄

〃

市ノ瀬町 末松 益美

〃

財津町 浦塚 時雄

〃

清水町 高倉 巖

〃

天神町 田中 清

〃

秋原町 檜原 一美

事務局長

三花公民館長 日野 正則

主事 前任

森山 一宏

主事 前任

吉長 一徳

主事

松井 顕一

カバー・さしえ岩沢光夫

さしえ石井明子

引用・参照文献

引用または参照した文献のおもなものを、関係の分野に区分して挙げる。ただし、一分野で挙げたものは、他の分野では再出しない。記載は、書名または論文名、著編者または全集、雑誌名、発行所の順。

歴史

- 豊後風土記（岩波古典文学大系）岩波書店
豊西記 大蔵和市（編）大蔵三光堂
豊西説話 森 春樹 山田精一
造領記 森 春樹 日田市教育委員会
九州天領の研究 杉本 勲（編）吉川弘文館
日田御役所から日田県へ 帆足達雄・広瀬恒太 帆足コウ
大分県史（古代篇） 大分県
羽野横穴墓群発掘調査概報 大分県教育委員会
日田市史 日田市
日田市十年史 日田市
日田市二十年史 日田市

日田市三十年史 日田市

日田記 芥川龍男・財津永延（編）文献出版

財津家譜 武石繁次・大蔵和市（編）財津家譜編纂部

懐旧楼筆記（広瀬淡窓全集） 思文閣

永山神主日記録抜萃 首藤助四郎（日田文化21号）

日田市教育委員会

享保十年豊後国日田郡羽野村明細帳写

（大分県地方史料叢書①）大分県地方史研究会

九州の浪人・財津久右衛門永治 熊谷武雄（天領日田第五号）

天領日田を見直す会

西埴の騷擾 安心院嘉六 日田市教育委員会

火はわが胸中にあり 沢地久枝（株）文藝春秋

日本史年表 歴史学研究会（編）岩波書店

明治のむら 大島美津子 教育社

教育・文化

亀山鈔 森 春樹 日田市教育委員会

蓬生談 森 春樹 日田市教育委員会

日本教育小史 山住正己（岩波新書）岩波書店

日本史小百科「学校」 海原 徹 近藤出版社

三花村誌 日田郡町村誌編纂会
教英中学の研究 高倉芳男(日田文化16号)

日田市教育委員会

浦塚茂自叙伝 浦塚茂 自家版

伏木近代史 梶原喜美雄 自家版

学校要覧 三和・花月・伏木各小学校、北部、戸山各中学校

百年のあゆみ 花月小学校、伏木小学校

咸宜園入門簿(広瀬淡窓全集) 思文閣

咸宜園出身八百名略伝集 中野 範 広瀬先賢顕彰会

宜園百家詩 大阪、河内屋茂兵衛

天領日田の文化財 日田市教育委員会

日田俳壇の変遷 井上柿巷 日田市教育委員会

近世九州俳壇史の研究 大内初夫 九州大学出版会

財津文書(日田市立淡窓図書館蔵コピー)

日田総合文化展出品目録 日田市、日田市教育委員会

図説豊後刀 山田正任 雄山閣

産業・交通

日田市百年の歩み 岩尾清一

日本の歴史 井上 清(岩波新書) 岩波書店

水田の考古学 工業善通 東京大学出版会

大分県史(近代篇・民俗篇) 大分県

大分県の百年 大分県

大分県蚕糸業史 大分県養蚕販売農業協同組合連合会

日田木材協同組合百年史 坂本武信(編) 日田木材協同組合

大分県土地改良史 大分県

日田林業の歩み 佐藤敬二 産業新聞社

九州のスギとヒノキ 宮島 寛 九州大学出版会

新・木綿以前のこと 永原慶二(中公新書) 中央公論社

日の隈町誌 日の隈町誌編集委員会

十二町史 十二町史編集委員会

日田市小野地区の植林史 野田高己(花月川上流地域の自然) 日田市立博物館

日田水害史 池田範六 日田時報社

伊能忠敬測量日記 今永正樹(編) 九州ふるさと文献刊行会

伊勢社参道中日記・田辺仁郎次(諸家日記)

日田の先哲 日田市教育委員会

三限鈔 千原豊太 日田市教育委員会

大分県と文学 小野茂樹 藤井書房

三限鈔 千原豊太

大分県と文学 小野茂樹 藤井書房

天皇陛下日田行幸記 廣瀬正雄

日田市寺院等調査録 日田市老人クラブ連合会

除蝗録・綿圃要務・広益国産考 大蔵氷常（日本農書全集）

農山漁村文化協会

豊後国志 唐橋世済 二豊文献刊行会

日田郡志 森仁里 大分県郷土史料刊行会

豊後国日田郡村誌（気運生動）末広利人（編）帆足コウ

貝原益軒杖植紀行 広瀬登美雄（天領日田第七号）

天領日田を見直す会

日田紙に関する調査のために 首藤助四郎（天領日田第八号）

天領日田を見直す会

大太郎 高瀬重市（天領日田第一〇号）

天領日田を見直す会

大分県の民謡 大分県教育委員会

くらしのことは 西義助 不知火書房

習俗

大分歳時十二月 染矢多喜男 西日本新聞社

詩誌・昼行燈 宿利博幸 自家版

日田・玖珠盆踊口説集 日田市教育委員会

方言

『俚言鈔』を追跡する 松田正義（現代方言学の課題）

明治書院

福岡県ことば風土記 岡野信子 葦書房

しやれことば 安倍鷹満 杵築方言研究会

全国方言辞典 東条操 東京堂出版

日本語相談 大岡信 朝日新聞社

三谷方言集 溝口連 むかし話をする会

三光村の民俗と方言 三光村教育委員会

その他

日田金石年史 武石繁次 日田市教育委員会

財津町史 財津町誌編纂委員会

資料提供者（敬称略・順不同）

― 刊行委員を除く ―

日田市立淡窓図書館 日田市立博物館 日田林工高等
学校 北部中学校 戸山中学校 三和小学校 花月小
学校 伏木小学校
竜川寺岩橋法雄 照妙寺高取義教
天神町 故 財津四郎 日野飛龍 宮川信子 大内強
横尾龍助 故 樋口明 樋口亀雄 田中秀一 田中晃
財津定美
清水町 用松丹吾 故 立花忠蔵 立花満 貞清政勝
伊藤清 諫山尊士 高倉キヨコ 立花朝守 立花豊
立花寛吾 立花忠 棕野新平 武内好高 諫山鼎三
棕野和夫 棕野有国 森山秀義 用松松子
財津町 故 浦塚門次 熊谷浦吉 浦塚隆章 熊谷幸一
郎 財津達男 末広良高 大塚義種
藤山町 荒川雅義
秋原町 井上誠 華藤エイ
市ノ瀬町 榎原栄 財津乙松 佐々木一平

伏木町 梶亥三郎 故 梶原松雄 柳瀬隆喜 梶原政
丸

小河内町 諫本正喜 財津三喜治

地区外 桑野陽吉 高瀬重市 吉水善無畏 吉田松

之助 野田ハルコ 谷本登 川津信雄

自治会長・自治会班長の各位にも、資料提供ならびに
刊行について、たいへんお世話になった。

『三花風土記』 発刊賛助費寄付者芳名録

各一万円

(順不同)
敬称略)

(天神町)

横尾 紘士	河野 通介	山上 寿	武内 良男
中村 芳雄	山城 高良	諫山茂太賀	山田 節子
坂本 稔	財津 巖	武内 治男	樋口 治利
田中 清	梶原 勝義	出野 交一	井本 正利
日野 飛龍	東口良太郎	出野 学	橘 昭寿
宮川 信子	日野 正則	大内 直	
横尾平三郎	田中 秀一	神 恒行	

(清水町)

浜田 真市	立花 貞雄	用松東八郎	樋口 祝男
立花 寛吾	立花 英一	高倉 学	椋野 有国
藤原 正夫	用松 清幸	貞清 政勝	椋野 和夫
武内 好高	高倉 貴司	貞清 秋夫	立花 豊

(財津町)

松本 厚	財津 達男	熊谷 淳	諫山 文彦
塩谷 勇次	末広 良高	財津 郡吉	浦塚 寅彦

恒藤 武 浦塚 恭孝 財津 利勝 中島 哲男

諫本 一秀 川村 長守 浦塚 隆章 高尾 貞雄

諫山 照信 森山 竜平 金崎 利生 浦塚 利夫

長尾 典人 岩橋 法雄 諫山 和男 大内 喜好

井上 久富 諫山 初夫 諫山 勝良 大内 峰生

諫山 潔 浦塚 時雄 坂本 英憲 森下 次男

諫山 建 熊谷 文雄 財津 昭一 桜木 照明

諫山 洋介 諫山 諸兄 諫山 隆 田中 信弘

浦塚 健児 財津 奎吾 諫山 文夫 大内 房夫

諫山 敬一 熊谷 郁男 金崎 正義 齊藤 千歳

坂本 利雄 末松 進 金崎 守次

吉田 純一 熊谷 邦久 金崎 正夫

(藤山町)

荒川九州男	古城 幾夫	田中 忠義
杉本 正則	里村 行男	一ノ宮久勝
荒川 至	長尾 正	財津 正年

(秋原町)

村上 勇	井上 清人	檜原 一美
藤原 義人	財津 永之	

(市ノ瀬町)

財津準之典 佐々木一平 菅原 勇吉 財津 乙松

財津 信 末松 益美 財津龍之典 田中 道夫

後藤 学 中島 靖昌 檜原 春夫

(伏木町)

長尾 勝弘 柳瀬 隆喜 山本 正明 井上 修二

梶原喜美雄

(小河内町)

財津 徹 財津 晴吉 財津 久人 諫本 正喜

(地区外)

森山 善明 貞清 誠 諫山 太平

(豆田町) (北九州市)

(鳥栖市)